

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

いよいよ最終段階です。

過去に記載しましたが、順序通りに載せますので良く味わいましょう。

身禊（みそぎ） 1の1

その249・その454

「身禊」の章で結論に近づいたこととなります。この「身禊」という言霊の最終的な操作を経て、言霊布斗麻邇の学問の総括論であります。「三貴子」（みはしらのうずみこ）の誕生となります。

天照大御神 月読の命 須佐男の命 のことです。

この言霊学の結論となります原理は、ここ二千年の間、人々の社会から隠されてきた日本民族の秘法と言うべきものでありますので、この小著の上で皆さんにお伝えする機会を授かりましたことは、著者にとってまことに光栄と思う次第です。

今よりお話しする言霊学の結論が、二千年間秘められて来た日本の宝なのだ、と言いましても、特殊な人が特別に手にすることが出来る或独特なものなのではありません。

いとも平凡な生活をしている人が、平凡な何かを思うとき、例えばサラリーマンが休日の朝、目を覚まし「今日は会社は休みだな。それなら今日一日どうして過ごそうかな」と考えるとき、

その人の心はどんな状態がどのように動き、「こうしよう」という結論に達するか、という心の内容とその動きを余すところなく明らかにした精神構造の学問に他なりません。

何度となくお話ししたことですが、古事記の神代の巻きは言霊布斗麻邇の教科書です。ただし普通の教科書ではありません。著者太安麻呂がある意図のもとに謎々の形で後世に遺した言霊学の教科書です。

謎々ですから古事記をただ当たり前に読んだり、自らの経験知識を以て推察したのでは、全く何を言おうとしているのか見当がつかないことになります。

けれどひとたび、古事記神代の巻きがアイウエオ五十音言霊学の教科書であることに気付き、その神話の中に出てくる神様の名前の意味を知り、

その意味と読者ご自身の心の内容とを比べてみる時、初めて明らかに古事記が言霊による人間の生きている心の構造とその操作方法を詳細に述べた書物なのだ、ということが理解されてくることになります。

お話しを始める前に、前提となるような事を結論が近づいたときに今頃、何故ことさらにお話ししたかと申しますと、この「身禊」の章以後に出てきますいろいろな神様の名前は今までに増して難解であり、

自らの心を見つめていただかないと何のことやらさっぱり分からないことになるからであります。

と同時にこれから出てくる神様の名前が示す言霊の操作方法の中に、言霊学を学ぶ人々にとって最も大きな問題の解決法が秘められている、とすることを強調したいからであります。それは何か。

言霊学の最も奥の院と言われる言霊 32 子音がもつ真実の姿を知るための唯一方法が述べられている事です。

前置きが長くなりました。以上の事をご留意いただきながら、「身禊」の章に入ることとしましょう。

その 250・455 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 1 の 2

その 250・その 455

## 古事記本文

ここをも以ちて伊耶那岐の大神の詔りたまひしく、「吾はいな醜め醜めき穢き国に到りてありけり。かれ吾は御身の禊せむ」

とのりたまひて、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到りまして、禊ぎ祓へたまひき。かれ投げ棄つる御杖に成りませる神の名は、衝き立つ船戸の神。次に投げ棄つる御帯に成りませる神の名は、道の長乳齒の神。次に投げ棄つる御裳に成りませる神の名は時置師の神。次になげ棄つる御衣に成りませる神の名は、煩累の大人の神。次になげ棄つる御禪になりませる神の名は、道俣の神。次に投げ棄つる御冠に成りませる神の名は、飽昨の大人の神。

文章は「身禊」の章に入りました。身禊のことをまたは禊祓とも言います。

身禊または禊祓と言いますと、現在の神道信仰では、信仰によって心身を浄めるために水浴びをしたり、滝に打たれたりする行だと思われています。しかし今まで説明して来ましたように、古神道言霊学に於いては決してそういう個人の魂の清浄を求めたり、罪穢れの赦しを願ったりする小乗・自利の行ではありません。

身禊とは、言霊五十音の原理に照らして、一切の文化の所産を摂取して、それぞれを人類の福祉増進に役立つよう操作・運用していく文明創造活動の根本となる行動のことを言います。自利でなく飽くまで利他の道徳・政治活動のことでもあります。語句を追って説明していきます。

本文

ここをも以ちて伊耶那岐の大神の詔りたまひしく

古事記上つ巻きの文章の中では、今まで伊耶那岐の神または伊耶那岐の命と書かれ、伊耶那岐の大神と大の字がついたのは今回が初めてであります。

では何故ここで大の字がついたのでしょうか。唯、禊祓を行う伊耶那岐の命を尊ぶというだけで大の字を付けたのではありません。古事記の著者、太安万侶の論理の緻密さがここでも想像されるところであります。

先に伊耶那岐の命は妻伊耶那美の命との協力で三十二の現象子音を生みました。

次に岐の命は主体である精神の側に於いて先天と後天の五十音言霊の内容を検討・整理して、主体側の真理としての建御雷の男の神という精神構造の原理を完成させました。

更に伊耶那岐の命は、去って行った妻伊耶那美の命を追いかけて行って、黄泉国外国の客観的学問文化を経験し、その自己主張・不調和・未整理を眼前にして、高天原精神界に逃げ帰ってきました。

そして今や建御雷の男の神という精神構造の原理を以て、不調和・未整理の外国の文化のそれぞれをどのように取り扱い、活用整理して、人類文明を創造したらよいか、の根本法則を確立しようという段階に進みました。

この時の伊耶那岐の命とは、単なる主体の責任者としての伊耶那岐の命ではなく、主体であると同時に客体であり、客体を包含した宇宙身の立場とも言えましょう。このように世界文明創造上の唯一の立場を伊耶那岐の太神と呼ぶのであります。

この太神という言葉について思い出しますのは、伊耶那岐の命と千引きの石をはさんで離婚しました伊耶那美の命によもつのおおかみ黄泉津大神と名付けた事です。この大神は伊耶那岐の大神のそれとは意味が違います。

伊耶那岐の大神とは客体を含んだ主体、伊耶那美の命をも含んだ全宇宙身という意味で有り、

黄泉津大神の大神とは岐の神と離婚し、文字通り単独で客観世界研究の責任者となった美の命に対する敬称です。

その 251・その 456 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

## 身禊（みそぎ） 1の3

その 251・456

本文

「吾はいな醜<sup>しこ</sup>め醜<sup>しこ</sup>めき穢<sup>おおみま</sup>き国に到りてありけり。かれ吾は御身の禊<sup>みそぎ</sup>せむ」

とのりたまひて、

伊耶那岐の太神は言いました、「私は大層醜い穢い国を見て来てしまいました。ですから私の身体の身禊をしましょう」とおっしゃいました、ということです。

穢い、とは氣田無いの意、生き生きとした精神の調和が保たれている言霊五十音図の原理のない国、即ち外国と言うことです。

御身とは、先にお話ししましたように、水浴びしたり、滝に打たれたりして心身を浄める身体という意味ではありません。

伊耶那岐の命の主観界と伊耶那美の命の客観界とを一つにした全宇宙身と言った意味であります。

「禊せむ。」とは伊耶那岐の命として経験して来た客観世界の文化を自らの言霊原理に照らして整理して、文明の創造に役立つようにしよう、と言う意味です。

本文

筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到りまして、禊ぎ祓へたまひき。

文章をただの昔の物語として読めば、筑紫（九州）の阿波岐原なる場所があったように思われる。

けれど禊祓が純粹の精神活動であること知れば、阿波岐原が実在の場所ではないことが直ぐに了解されます。

それは精神上の場所を示した謎なのです。

筑紫とは尽くす、の意で、心の全てを尽くすこと。日向は日に向かうの意で、生命の光りに直面する、ということ。

橘の小門とは、<sup>たち</sup>性を表す言葉の名の音の意味で、言霊のことを示します。すると筑紫の日向の橘の小門で言霊五十音の全部と言うことになります。

阿波岐原は下図を参照ください。

ワ									ア
									オ
									ウ
									エ
キ	ニ	イ	リ	ミ	キ	シ	チ	ヒ	イ

ギ

伊耶那岐の命の音図である菅麻音図の四つの隅の音を五十音の代表として取り出すと、アワイキとなります。そのうち、イキが詰まってギとなり、アワギの言葉が生まれます。



原は場を意味しますから、阿波岐原で五十音言霊図表と言うことになります。としますと、随分長い名前ですが、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原の全部で五十音言霊図表ということになります。

伊耶那岐の大神は、この五十音言霊図表の見地に立って、黄泉国の客観的研究の学問を摂取し、調御してそれぞれに所を得しめる決定的大原理の確立の仕事（禊祓）の検討に入ったのであります。

「注1」 黄泉津国とは黄（萌）ざす泉の国と書く。物質であれ、精神的であれ、客観世界の研究の学問は全て外国に於いて発生する。それはいろいろなものが芽を吹き出す泉のごときものである。

それは際限なく分岐・発展して幾種類もの学問分野を形成していく。しかしこの客観的研究の成果を人類の福祉目的に適うよう調整・整理する能力をこの学問自体は持っていない。そこに究極に於いて精神の学である言霊の原理の登場があるわけである。

252・457につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ）1の4

その252・457

本文

かれ投げ棄つる御杖に成りませる神の名は、衝き立つ船戸の神。

なげ棄つる、とは文字通りの投げ捨てる、ということではなく、ここでは禊祓即ち種々の外国の文化を取り入れ、人類文明としてコントロールして行く為に、その判断の基準として言霊原理を外国の文化の上に投入することです。

御杖とは精神のよりどころである人間天与の判断力のこと、仏教の禅では挂杖子といい、剣と言い、キリスト教ではアロンの杖などと呼びます。

それでは伊耶那岐の大神は禊祓の判断基準として何を投入したのか、と言いますと、先に内面的に完成した建御雷男の神と言われる精神構造図です。

この禊祓の為に投入した建御雷男の神のことを、衝き立つ船戸の神と言います。

衝き立つ、とは齋き立てる、の謎です。船は人を運ぶもの、言葉は心を運ぶものです。伊勢神宮のご神体である八咫鏡は舟形をした台の上に乗っています。そこで衝き立つ船戸の神というのは、禊祓をするために、心の中に齋き立てられた言霊五十音の原理の戸、即ち鏡ということです。

武御雷男の神と衝き立つ船戸の神とは、精神構造としては全く同じものでありますが、その操作の段階や用いる時と場の違いによって呼ぶ名の神名が異なってくるのであります。

さて、この衝き立つ船戸の神に続いて、道の長乳歯の神等五つの神名が出てきます。

この五神は禊祓の操作をするために規範として齋き立てた衝き立つ船戸の神という精神構造を示す音図に参照して禊祓の操作を行う前に、まず天津菅麻音図上に於いて黄泉の国の文化を整理・検査する五つの検査事項を示すものと考えられます。このことを念頭に置いて五神名の解説に入ります。

次に投げ棄つる<sup>みおび</sup>御帯に成りませる神の名は、<sup>みち</sup>道の<sup>なが</sup>長<sup>ちは</sup>乳歯<sup>かみ</sup>の神。

帯は結んだり、まとめたりするもの、緒霊（おび）・尾霊（おび）の意で、物事の関連性・連続性ということでもあります。道の長乳歯の神。も同様の意味で有り、道とは物事の道理と言うこと、長乳歯の神子供の歯が生えそろってそれぞれが長く連続している事の意です。外国文化を整理するため菅麻音図上に於いて、その外国文化の内容の連続性・関連性について調べることであります。

「注 1」 衝き立つ船戸の神に続く諸神名で示される禊祓の手順を大和石上神宮に伝わる布留の言本は「ヒフミヨイムナヤコトモチロラネシキルユキツワヌソヲタハクメメカウオエニサリエテノマ  
スアセエホレケ」と直接四十七言霊を以て示している

その 253・458 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

## 身禊（みそぎ）1の5

その 253・458

本文

次に投げ棄つる御裳に成りませる神の名は時置師の神

古事記の別の本には御裳の所を御囊と書いてあるものがあるが、ここは御裳が正しいようでありま  
す。裳は百で心の衣です。また裳とは腰より下に付ける衣で、襷ひだがあります。天津菅麻音図の下段は  
イよりキにいたるイ・チイキミシリヒニ・キと、イとキを除けば八つの父韻が並びます。以前にもお  
話ししたように、八つの父韻の配列は事物の現象発生の変化のリズムを表します。

伊耶那岐の大神の御裳である言霊図の下段の八父韻を投入すると、時置師の神が生まれた、とあ  
ります。時置師の神を時量（ときはかし）の神と書いている本もあります。両方とも同様の意味合い  
の言葉です。時は時間、置師（量）は検討し、決定することです。神はその働きと言った程の意味で  
あります。

時とは何なのでしょう。「桐一葉 落ちて天下の 秋を知る」という句があります。夏の季節、  
青々としていた桐の葉が、何時の間にか萎れて落葉した。「ああ、 秋が来たんだな」と思います。

事物の実相（姿）の変化が時の移り変わりである、ということがなければ、時というものは考えられ  
ません。実相の変化が時というものの内容でもあります。

人間が日々経験するいろいろな現象、それが自然のものでも、また人為的なものであっても、皆それぞれ特有の変化のリズムを持っています。そのリズムを言霊布斗麻邇の鏡に照らして調査・検討することを時置師（時量）の神というのであります。

人間の心が住む五つの次元のそれぞれに現れて来る現象の変化のリズムを八つの父韻の配列によって見きわめることです。

次に各次元に適合する代表的な五十音図の時置師を挙げることにしましょう。

ウ次元 キシチニヒミイリ 天津金木音図

オ次元 キチミヒシニイリ 赤玉音図

ア次元 チキリヒシニイミ 宝音図

エ次元 チキミヒリニイシ 天津太祝詞音図

イ次元 チキシヒイミリニ 天津菅麻音図

本来イ次元の父韻の並びは不特定のためここでは主体側チキヒシ（陽性音）、客体側ミリイニ（陰性音）の並びで表記

「注」

宇宙は種々の現象（実相）を現出する。その現象は時間・空間・次元の組み合わせによって生まれる。

その現象を唯一の現象として特定化するのが時処位である。だから実相には必ず時処位が具わっている。

古事記には時置師の神と一つの置師しか書かれていないが、実際には処置師、位置師の二つの置師も存在する。

処置師は空間の中の場所を決定し、位置師はアオウエイという五つの段階次元の重畳の配列順を決定していく働きである。

以上合計三つの置師の決定を三置（みち）という。道（道理）の語源の一つである。時は空間の変化で有り、空間は時間の内容とすることが出来る。

時間の無い空間はなく、空間のない時間はない、そして時間も空間もアオウエイという五つの次元の中の一つの次元の広がりについて言えることであって、時間と空間は次元の一部であります。その時間と空間の畳（たたな）わりが次元宇宙なのである。

その 254・その 459 につづく

次に投げ棄つる<sup>う</sup>御冠<sup>みかかぶり</sup>に成りませる神の名は、飽咋<sup>あまぐひ</sup>の大人<sup>うし</sup>の神<sup>かみ</sup>。

冠は帽子のことで、頭にかぶるもの、五十音図で言えば一番上のア段に当たります。

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ）1の6

その254・459

本文

次になげ棄つる<sup>みけし</sup>御衣に成りませる神の名は、<sup>わずらひ</sup>煩累の<sup>うし</sup>大人の<sup>かみ</sup>神。

煩累の大人の神を和豆良比能宇斯能神と書いた本もあります。意味は同じです。伊耶那岐の大神の御衣とは心の衣のことで、五十音図を指します。煩累とは意味が不明瞭で曖昧な言葉のこと。

大人とは家の主人公の意。そこで煩累の大人の神とは、五十音言霊音図に照らして、わずらわしい曖昧な言葉を整理して、言葉をはっきり確認する働き、とすることになります。

次になげ棄つる<sup>みはかま</sup>御禪になりませる神の名は、<sup>ちまた</sup>道俣の<sup>かみ</sup>神。

禪とは胴体から二本の足が入るように二股に分かれている衣類のこと。

道俣も街道がある一点で二方向に分かれた場所のこと。物事の整理を行うには、表裏・陰陽・主客・前後・左右・上下等の分離・分岐を明らかに見定める必要があります。

道俣の神とは、言霊図に照らして物事の分岐点を明らかにする働きのことです。

事物の実相はア段に立って見る時、最も明らかに見ることが出来ます。

そこに顕れる飽咋の大人の神（飽咋の宇斯の神と書かれた本もあります）とは、飽は明らかな意、咋は組む霊の謎です。大人は主人公の意。飽咋の大人の神全体で、事物の実相を明らかに見て、それを言霊（霊）に組んで行く働き、とすることになります。

「注」この飽咋の大人の神までの働きが先に示した石上神宮の布留の言本の「ヒフミヨイムナヤコトモチ」である。

その 255・その 460 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 1 の 7

その 255・その 460



本文

以上で外国の文化・学問の上に建御雷男の神という主観内の真理の精神構造を投入して、禊祓を行う工程である衝き立つ船戸の神より飽咋の大人の神までの六神が示す謎々の説明をしてきました。

大方のご理解は得られたものと思います。衝き立つ船戸の神という禊祓の鏡と、禊祓の前に行う外国文化の整理方法を示す五神を投入して、して次にどんな事が起こるのか、を解くのが次に続く古事記の文章です。

ところがそこで出てくる神様の名前の示す謎が難解です。今までの神様の名前はそれが現われる時処位を知っていれば大体の予測は出来る範囲のものでありますが、奥疎の神以下の六神の名前は、ただ漫然と考えていたのでは見当が付きません。

この神名を理解し得る唯一の方法は、読者自身が禊祓を実施する立場に立って、その時に自らが経験する心の動きの内容を見きわめていただくより他はない事であります。このことを念頭に置いて、古事記の次の文章に入っていくことにしましょう。

次に 投げ棄つる左の御手の手纏み て たまきに成りませる神の名は、奥疎おきさかるの神。次に奥津那芸佐毘古おきつ なぎ さひ この神。次に

奥津甲斐辨羅おきつかひべらの神。次に投げ棄つる右の御手の手纏み て たまきになりませる神の名は、辺疎へさかるの神。次に

辺津那芸佐毘古へつ なぎ さひ この神。次に辺津甲斐辨羅へつかひべらの神。

伊耶那岐の大神は、人類文明の創造の大法則・大原則を確立するために、内面的真理である 建御雷之男の神という精神音図を自らの心の中に判断の鏡として 齋<sup>いつきた</sup>立てたてました。( 衝き立つ船戸の神)そして高天ヶ原以外の国々で発生発展してくる外国の文化 学問を天津菅麻音図に照らして、 それらの内容を明らかにして、禊祓をやり易くする作業が続きます。

その整理作業は衝き立つ船戸の神に続く五神、道の長乳歯の神、時置師の神、煩累の大人の神、道俣の神、飽咋の大人の神、という神名が示す5つの要点から判断されることが示されました。

さて 以上お話ししました 衝き立つ船戸の神を判断の基準となる鏡として、禊祓の実際活動が始まることとなりますが、その活動とは、人間の心の中でいかなる動きとなるか、を示すのが次に出てくる六つの神名です。

並べてみますと 左の御手の手纏になる奥疎の神、奥津那芸佐毘古の神、奥津甲斐辨羅の神の三神と、右の御手の手纏になる辺疎の神、辺津那芸佐毘古の神、辺津甲斐辨羅の神、の三神、合計六神です。この六神の神名が、心の中の動きのどんな内容を暗示しているのか、をまず神名の文字の解釈から始め、次に実際に人間の心はそれによってどう動くかを説明することにしましょう。その 256・その 461 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

## 身禊（みそぎ）1の8

その 256・その 461

本文

次に投げ棄つる左の御手の<sup>みて</sup>手纏<sup>たまき</sup>になりませる神の名は、

手纏とは古代、玉などで飾り、手にまとして飾りとしたもの、と辞書にあります。伊耶那岐の大神の實につけた、「左の御手の手纏」と言うのはもちろん謎です。ではどんなことか。

それは伊耶那岐の大神が整理と判断を行う場である自らの心の構造を示す天津菅麻音図関しての事柄です。五十音図全体を人間と見立てますと、左の御手の手纏とは、人間が両手を広げた形の左の手の飾り、音図で言えば、音図に向かって1番右の縦の1列すなわち5つの母音アオウエイの並びと言うことになります。

右のように考えますと次に出てきます右の手の手纏になりませるの右の御手の手纏とは音図に向かって1番左の端の5つの半母音ワヰウヱヲの1列と言うことになります。

さて左右の御手の手纏から出てくる神の名前ですが、その冠についている奥・辺・奥津・辺津を除きますと、左右全く同じ名前の三組の神ということになります。そこで字句の説明でもまた実際の動きの解説にも便利なように、六神を奥、辺、奥津、辺津、のついた三組の神名として取り扱って行くことにします。

おきさかる 奥疎の神、へさかる 辺疎の神（その1）

奥疎の奥は、起、興で発端を示す積極・陽性音です。それに対し辺疎の辺は 山の辺、海辺に見られるように 端の方であり、物事の終局や終結の方向を示して消極・陰性音です。

奥疎、辺疎の疎は古語で、離れる、隔てるの意。そこで奥疎とは、物事の発端となるものを他の物から隔てると、言うことになります。

同様に辺疎と、は 物事の終局となるものを他のものより遠ざけ、隔てると言うことになります。これら奥疎・辺疎が実際にどんな心の動きをするか、は字句解釈の次にお話します。

おきつなぎさひこ 奥津那芸佐毘古の神、へんつかいべら 辺津甲斐辨羅の神（その1）

奥は 起で 物事の発端・陽性音であって音図で言えば向かって右の五つの母音の側です。

辺は反対に発端より遠ざかる物事の終結の方向で、音図で言えば向かって左側の半母音の方を意味します。奥津・辺津の津は渡すという意味。

では那芸佐毘古とはどんな意味でしょうか。 ちょっと見ただけではさっぱりわかりませんが、とにかく字句の解釈として、詳細は実際の心の働きで説明することにします。 文字をそのまま解釈しますと那芸佐毘古とは総ての（那）業を助ける（佐）働き（毘古）となります。  
その 257・462 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ）1 の 9

その 257・その 462

おきつかひべらの神・へつかいべらの神（その1）  
奥津甲斐弁羅の神・辺津甲斐辨羅の神（その1）

奥津・辺津は既に説明しました。 では 甲斐辨羅とはどんなことでしょうか。 甲斐は現在の山梨県の呼名ですが、この場合はそうではありません。 甲斐は山峡やまかいなどといわれる山と山との間、隔たりの意、であります辨羅とは減らす、 少なくするの意です。

そこで奥津甲斐弁羅の神の全体では発端になるもの（奥）を渡して（津）物事の隔たり（甲斐）を少なくしてゆく（辨羅）の働き（神）ということになりましょう。

同様に辺津甲斐辨羅の神では、集結する結果となるもの（辺）を渡して（津）物事の隔たり（甲斐）を減らして少なくして行く（辨羅）べらの働きの神となります。

以上奥疎の神以下六神の信明神名について字句のみの解釈をしてきました。しかし 多分この六審神の実際の内容については読者はしっかりした理解はなさっていないことと思います。そこでこれら六神の神名が示します働きの、人間の心の中での実際の活動について解説を申し上げようと思います。この実際活動の詳細が了解されますと 古事記の編纂太安万侶の人間心理に対する洞察の精細さ・素晴らしさに驚嘆せざるを得ないこととなります。

伊耶那岐の大神は 禊祓いを実行するために自らの心の中で確認されたたけみか土建御雷の男の神という構造を持った音図を突きたてました。衝き立つ船戸の神であります。

この音図を判断の鏡として、黄泉国外国の学問文化を整理し、人類の福祉に役立つようコントロールします。次々に創意工夫されて持ち込まれてくるそれらの学問・文化は 道の長乳齒の神の神以下五神の名前で示される五つの点について心の中で詳細に検討され、その外国の学問文化の真実の姿が浮き彫りにされます。

浮き彫りにされどのように処理して行くかが、奥疎の神以下六神の働きです。これによって伊耶那岐の大神の主観内のみ心理であった建御雷之男の神という真理が 名実ともに客観世界に適用されて誤りのない絶対的な大真理となります。そうなった真理天津太祝詞音図または天照大神の八咫の鏡と呼ばれるものです。

主観内で確かめられた鏡を他に適用して行く過程をお話申し上げるわけでありますので、度々同じことを繰り返して誠に恐縮なのですが、読者ご自身が伊耶那岐の大神の立場に立ったつもりになってご自身の心の中に実際にどんな経過が、起こるかをお考え下さると好都合をと存じます。

さてある1人の人間が例えば私自身が私の心の中に建御雷の男の神という心の構造の音図を突きたてました、ということは私は建御雷の男の神という鏡に従って行動するのだと、確信したことです。そしてその前に1つの問題が提出されてきます整理されて、確実に人類の必要な文化として仲間入りすることができるか、どうか、決定される素材としての学問・文化です。

するとその学問・文化の持つ特性・内容・外観等々全てにわたって、自分の自分本来の菅麻音図上において 道の長乳歯の神（連続性）、時置師の神（音図における時処位の決定）、煩累の大人の神（曖昧さの除去）、道俣の神（物事の分岐点の確認）、飽咋の大人の神（物事の真実の姿の確認）という五つの観点からの判定がたちどころに行われます。

天津菅麻音図上の道の長乳歯の神以下五神というコンピューターによって、予め整理・検討された外国文化の内容が衝き立つ船戸の神という禊用のコンピューターに送り込まれ、世界文明創造を可能にする数価として算出される、といった具合であります。

その258・その463につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ）1の10

## 奥疎の神・辺疎の神（その 2）

そこで 奥疎の・辺疎の神の実際活動としての登場です。単なる帳簿のデータの整理でしたら、その内容が明らかになれば、それを新たに記入すれば仕事は終わりとなります。けれど 社会創造の活動においてはそう簡単にはいきません。なぜなら 整理するといっても その提出された学問・文化には それを思いつき 育て上げてきた担い手である生きた人間がいるということです。その担い手を完全に説得し 納得させなければ 整理コントロールはできません。帳簿の整理とはそこが異なります。

前にも申し上げましたように、奥疎の奥は陽性音で音図で言えば向かって右アオウエイの五母音の側です。反対に辺疎の辺は陰性音で音図の向かって左はワヲウエヰ五半母音側です。天津菅麻音図という心の構造に 照合されその実相と 内容がすっかり明らかにされた外国の学問や文化は その内容・価値を 整理の出発点である心のなかの音図の母音側に整理され、集められなければなりません。その作業工程を 奥疎、すなわち起きである出発点によせていく（疎る）と名付けられました。

整理されるべき物事の内容・価値が 整理の出発点に寄せ集められますと、同時進行的に整理する人の心の中では、その学問・文化の価値・内容から見て、当然それが人類の文化の全体の何処に位置するべきかの結論も明確に決定されます。

辺疎の辺すなわち音図の半母音側である結末の方向に その整理の結果が寄せ集められるように決定されます。この働きを辺疎の神と呼びます。この場合心の中では奥疎と辺疎は全く同時進行的に行われることでしょう。そうでなければ衝き立つ船戸の神という鏡に従って 禊祓いされる材



料とはなり得ません。

奥疎・辺疎で整理する実際活動の出発点と結論の内容は決定しました。しかし前にも申しましたように、それで整理の完了ではありません。整理完了するまでにあと二段階の働きが必要です。それが興津・辺津的那芸佐毘古と甲斐辨羅です。

その 259・その 464 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ）1 の 11

その 259・その 464

### 奥津那芸佐毘古の神・辺津那芸佐毘古の神（その 2）

社会の文化創造上、新しく発生した 1 つの学問・文化が持つ内容と価値、社会に占める位置が、心の鏡に照らされて決定されますと、次にその新しい学問・文化の発想者・発見者に対して、こちらの判断が極めて妥当であり、真理にかなっており、発想者自身もそれで納得ができるような言葉が生み出されなければなりません。言葉が状況に応じて選ばれなければなりません。禊祓いの行為とは言霊工の次元の現象であるのです。

極めて卑近な例を挙げてみましょう。私の友人に 1 人のアルコール中毒者がいます。朝から晩までアルコール気が切れることはありません。もし切れたら心の寂しさに気が狂わんばかりになるそうです。当然年も年の事とて血圧が上がります。いつ測っても血圧が 200 を下がったことがないそうです。

通院しているそのお医者さんは、決まったように血圧を測り、「お酒をやめなさい。そうしないと近いうちに死んでしまうよ」と言うそうです。医学知識という鏡に照らして医者の中には、私の友人の健康状態の判断（現内容）とその結末がはっきり書き出され、その現状と結末をそのまま患者に伝えているのでしょう。

そのお医者さんの言葉は 一見、正しいようにも見えます。けれど私の友人にとっては何も言ってくれないのと同様なのです。なぜなら、私の友人自身医者の言葉どうりに思い、そのままでは 早晚死んでしまうだろうと思っているからです。

しかも現在の寂しさに負けて、酒を飲まずにはいられないのです。もし診察に際してこのお客さんが このお医者さんがもう一歩踏み込み、患者の心の寂しさの原因を務め突き止め、その上で患者に少しでも納得が出来る治療への道を示す言葉をかけてやる事があつたら、そのお医者さんは私の友人にとって救世主とも思える人になることでしょう。言霊工次元の言葉とは、そういう選ばれた言葉なのです。

そこで 奥津那芸佐毘古の神・辺津那芸佐毘古の神の働きの説明です。それは外国の学問・文化の発想者が納得・了解しうる言葉が創出される過程としての働きです。

奥である鏡に照らされた物事の実態が持つ内容・効能（芸）のすべてが（那）を助け生かして（佐）一つの創造的な言葉に渡す働き（毘古）、奥津那芸佐毘古の神とはそうゆう意味を指しています。

同時に、その創造の言葉を作り出すためには、鏡の前に明らかにされた落ち着くべき結論に 必ず到達することを可能にする言葉でもなければなりません。そのための働きが辺津那芸佐毘古の神です。辺である結論をもたらすよう（津） その結論として落ち着く全ての（那）内容（芸）を助け決定する（佐）働きの（毘古）言葉（神）ということです。

一つの学問や文化のもつ内容の価値を全て活かし育て（奥津那芸佐毘古）、それを同時に確定された結論としての文明上の位置に確実に収まることを可能にする言葉を選び作り出す（辺津那芸佐毘古）働きの両方を言霊工の次元の言葉は必要とするのです。この条件が完全に満たされた言葉は、その時、その場で場において「至上命令」と成り得る言葉なのです。

「注1」全ての物事のもつ価値内容を拾い上げ、それを人類文明の中に取り入れて行く 古神道 禊祓の道法を、仏教では 阿弥陀仏の「一切衆生、攝取不捨」と言っている。

その 260・その 465 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ）1 の 12

その 260・その 465

奥津甲斐弁羅の神辺 津甲斐辨羅の神（その2）

ここまで説明してきますと、奥津・辺津の甲斐辨羅二神の働きの内容は容易に推察される ことと思います。提起された物事の価値内容をことごとく攝取する（奥津那芸佐毘古）ことが出来る言葉、それと同時に進行しているその物事の決定された結末に確実に落着させることができる（辺津那芸佐毘古）言葉の二つの言葉は、心の中で一つの言葉としてまとめ挙げられます。その時、奥と辺との双方から考えられた二つの内容の言葉の間は限りなくその間隔（甲斐）は狭められ（辨羅）、最後にひとつの創造の言葉となります。

この時、奥すなわち発端の方に働く力を奥津甲斐辨羅の神といい、結末の方向に動く働きを辺津甲斐辨羅の神と呼びます これら二つの働きによって創出された文明創造の言葉は、人類社会から 1

つ1つ考案・発想された文化の兆しを、その内容・価値に従って人類文明の内容として摂取し、各自所を得さしめる最高の統治能力となることのできる輝かしい言葉なのであります。

ちか  
知訶島またの名を天の忍男  
おしお

以上お話ししてきました衝き立つ船戸の神より辺津甲斐辨羅の神まで合計十二神が精神宇宙に攻める区分を知訶島または天の忍男 と呼びます。

知訶の知は知識、訶は叱り、たしなめるの意味。黄泉国外国において人間の経験知として発想された学問知識を、人類文明創造の最高の規範（鏡）に照らして、それを整理し、その価値・人類文明に占める位置を決定して行く働きの区分ということです。

天の忍男 とは人間精神の典型的構造（天）大いなる（忍）働き（男）という意味です。人間精神性能の中でこれ以上の大きな働きはほかに存在しません。

その 466 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ）1 の 13

その 466

タカマハラナヤサ（高天原成弥栄）

言霊布斗麻邇の 学の 総結論である 人間精神の 最高規範（鏡） 構造を示す五十音図を天津太祝詞と呼びます。

その時置師は 八つの父韻チキミヒリニイシ（タカマハラナヤサ）です。禊祓いが行われ、その実行者が 歴史創造の言葉を発する瞬間（中今）、 実行者の心の中に 描かれた現象創造の手順です。その言葉が実行に移された時、 現実の事態は その時置師の配列の順序に従って進行して行きます。

この章で説明しました 衝き立つ船戸の神以下十二神の働きは 右の時置師の前半の（タカマ）の詳しい解説であることに気付きます。

鏡として齋き立てた 衝き立つ船戸の神より飽咋の大人の神までの六神は父韻タ（チ）の内容です。タは田であり、鏡としての精神構造図です。

次に出てくる奥疎の神以下六神は、鏡の前に決定された現状（カ） とその結末（マ）の双方満足させて整理を遂行する創造の言葉（ハ） をいかにして決定するか、の手順を 神名の謎で小気味よく説明したものです。

建御雷之男の神という音図を 心の内に衝き立つ船戸の神と齋立てて、 これを鏡として外国の 学

問・文化の禊祓いをするとき、心の中で創造の言葉がどのように創り出されてくるか、のメカニズムが確認されました。

そこで今度はその心の動きのメカニズムを阿波岐原の天津菅麻五十音図表の個々の言霊の動きで見るときどうなるか、すなわち人間の最高の道德の規範（鏡）となる言霊構造とその動きの確立という禊祓の最終段階の検討に入ります。

それによって斎立てた建御雷の男の神なる音図構造が総結論としての天津太祝詞音図（八咫鏡）という主観的であると同時に、客観的に適用して誤ることなき大真理として確立されます。

さてそれでは主観的であると同時に客観的な真理とはどのようにして確かめられるのでしょうか。それは最終的にはその心の内容が、心の究極要素であると同時に、言葉の最小単位でもある五十音言霊、特に実相の最小単位である三十二の子音によって構成されている構造とその動きとして、確認されることでありましょう。古事記本文を進めることにしましょう。  
その 261・その 467 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ）1の14

その 467

伊耶那岐の命、御佩<sup>みは</sup>かしの<sup>とつか</sup>十拳の剣を抜きて、その子迦<sup>か</sup>具<sup>ぐ</sup>土<sup>つち</sup>の神の  
<sup>くび</sup>頸を斬りたまひき。

迦具土の神とは言霊ン（表音神代文字）を示す火の夜芸速男の神の別名、火の迦具土の神の事です。

その頸とは組霊の謎で、霊である言霊を組んだもの、の事。此所では菅麻音図を意味します。今まで五十音言霊の一つ一つの検討が続けられて来て、これからはその五十音によって組まれた人間の精神構造全体に撞いての検討が始まることとなります。

ここに古事記で初めて十拳の剣と言って、剣という言葉が出てきました。古事記に於いても同様ですが、一般に神話や宗教書にある剣というのは、物体を斬る刀のことではなく、頭の中で物事の性質を検討するための天与の判断力の事を言います。この判断力は大きく分けて三種の種類があります。十拳剣・九拳剣・八拳剣です。

では此所に出てきた十拳剣とは握りこぶしを十個連ねた長さの剣ということですが、勿論それは謎の言葉です。精神上的の剣の場合、十拳とは十と言う数を示します。十拳剣とは物事を十数を以て検討する判断力の事です。

十数で判断すると言っても見当がつかないかも知れません。十数とはア・タカマハラナヤサ・ワと横に十個の言霊が並ぶ天津太祝詞と呼ばれる五十音図が後の章登場しますが、その音図に示される精神構造に基づいた判断、と言うことなのです。後程詳しく説明されるでしょう。そして十拳剣は主として天照大御神または伊耶那岐の神が用いる判断力です。

十拳剣で迦具土の頸を斬った、ということは、表音神代文字で表された五十音図を十拳剣と呼ばれる人間精神構造の判断力を以て、分析・検討を開始した、と云うこととなります。

## その御刀の前に着ける血・湯津石村に走りつけて

迦具土の頸である五十音言霊の集まりを十拳剣で分析・検討して人間の心の構造がどうなっているのか、を調べる作業が始まります。御刀に着いた血とは分析して分った道理（血）ということ。御刀の前というのは、次の文章で「前」の次に御刀の「本」、御刀の「手上」と分析・検討が進展していく様子を示すためです。

湯津石村の湯津は五百個の謎です。アオウエイの五母音を基調とし、五十音を上下にとって作った

百音図のことです。岩村は五十葉叢で五十音図のこと。湯津石村全部で五十音図を指します。

文章全体で、五十音の一つ一つ集まりを分析・検討する主体側の心の構造とその動きが五十音図の構造と結びつき（走りつけて）、その関連で分析・整理・運用の道理が次第に明らかになっていく、という事であります。

その 468 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ）1 の 15

その 468

成りませる神の名は岩折の神



岩折は五葉裂くの意。分析の結果まず五十音図言霊がアオウエイの五つの段階に分割されることが分った、ということです。言いかえますと、人間の精神宇宙とは五つの次元がたたなわっている構造していることが分った、ということです。

人間の精神に関する一切のものはこの五つの次元宇宙から現出して来るものであって、それ以外のものはありません。この「五葉裂く」の道理は世界の哲学・宗教の基本であります。

この「五葉裂く」の道理は人々が会話する言葉に注目しているとよく判ります。心が言霊ウの次元に住む人間同志の会話は各自自分が経験した事柄をその体験の順序通りに一部始終しゃべります。いきおい会話は長くなります。若い同志の電話の会話はその典型です。

オ次元に住む人の会話には抽象的概念的言葉がやたらと出てきます。社会主義新聞の論説などはその見本といえます。言霊アの次元では詩や歌が、言霊エの次元では「かくすべし」の至上命令がその典型的言葉となります。

言霊イの次元から言霊が、そして他のウオアエ次元に住む人々の心に合わせた自由自在の言葉が出てきます。

## 次に根折の神

根折く、は音裂くまたは根裂くの意。音ととれば泣沢ぐ音の事となります。現在検討している菅麻音図は母音がアオウエイとならび、その根とは最下段の言霊イであり、音図全体で言えば八つの父韻の事です。現象を生む創造意志の原律である八つの父韻がどのような順序で並んでいるか、が検討・確認されることでもあります。

#### 天津菅麻音図

ワ									ア
ヲ									オ
ウ									ウ
エ									エ
キ	イ	ニ	リ	ミ	ヒ	シ	キ	チ	イ

その 469 につづく

#### 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

##### 身禊（みそぎ）1 の 17

その 469

#### 次に石筒の男の神

石筒は五葉筒または五十葉筒の意味。五十音言霊図は縦にも横にもそれぞれの列が一本の筒のように、人間の心が動く通路のように連続して変化・進展しているのだ、という事が確認された、ということです。天津金木音図を例にとりますと、五母音アイウエオの横の上段ア・カサタナハマヤラ・ワも一本の通路のように一定の内容をもって連続して変化・発展しています。石筒の神と書かずに石筒の男の神と男の字が付けられているには理由があります。このことはすぐ後に出てくる武御雷の男の神の項で説明いたします。

次に御刀の本に著ける血も、湯津石村に、走りつきて成りませる神の  
名は、甕速日の神

人間の心を構成している五十個の言霊を検討して、先ず初歩的なまとめ方としての和久産巢日の神  
(天津菅麻音図)を得ました。つぎにその初歩的に確認された音図を分析することによって伊耶那  
岐の命自身の心のあり方を確認して行く事になります。(つまり主体側の心のあり方)

「御刀の前」の次に「御刀の本」と分析・検討が進展していく度合いを示します。そこで分った事柄  
が五十音言霊図(湯津石村)と比較・検討されて、心の構造の道理(血)が更に深く甕速日の神と確  
認されました。甕速日の神の甕はアイウエオ五十音を粘土板に彫り込んで素焼きにしたもので言霊  
図を指します。速日の日は言霊の霊のこと、速日とは言霊が言霊図の上でどのような内容を表し  
ているか、が一目で(速)分るようになっていることが確認されたことであります。

五十音言霊図を見るのに二通りの方法があります。その一つである甕速日とは言霊図全般の上で一  
つ一つの言霊の集が何を表しているのかが一目で理解できる様に整理検討されたのであります。い  
わば言霊図を静的な状態に於いて検討したこと、と言うことが出来ます。静的な言霊図の検討とい  
えば、天津金木音図、天津菅麻音図・・・等の五十音言霊図表もその例であります。  
その470につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊(みそぎ)1の17

その470